

年刊歌集

一九九三年版

日本歌人

年 刊 歌 集

1993年版

日 本 歌 人 ク ラ ブ

平成5年12月10日印刷
平成5年12月20日発行

年刊歌集 一九九三年版

編集者 年刊歌集編纂委員会

発行者 水上正直

発行所 日本歌人クラブ

〒一五〇

東京都渋谷区恵比寿西一・二・三

エビスマンション四〇八号

電話

〇三・三七八〇・三七三二(代)

振替口座

東京 八一一三二二七四番

印刷所

図書印刷株式会社

〒一〇八

東京都港区高輪一・三・十三

定価 四、〇〇〇円(送料共)

1993年版目次

な	と	て	つ	ち	た	そ	せ	す	し	さ	こ	く	き	か	お	え	う	い	あ
.....																			
二八九	二八一	二八〇	二七二	二七〇	二三八	二三七	二三三	二一八	一九九	一七一	一五四	一四四	一三二	一〇二	七二	六八	五七	二一	一
出詠者住所録	わ	ろ	り	よ	ゆ	や	も	む	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の	ね	ぬ	に
.....																			
巻末	四六一	四六一	四六一	四五一	四四九	四二四	四一五	四一二	三九三	三七六	三六九	三六九	三五三	三四四	三二五	三二一	三二一	三二〇	三一三

厚	15	安	1
渥	16	足	3
天	16	阿	4
甘	16	会	6
雨	17	相	6
綾	17	青	7
鮎	17	赤	10
荒	17	秋	11
新	19	浅	12
有	20	麻	14
		朝	14
		芦	14
		味	15
		梓	15
		東	15

夏の終り

黒き種吐きちらしてぞ通草の実食べつつ飽かず田舎人われは
朝涼のひとり歩きに見出でたる虎杖のしろき穂花掌に載す
ごく地味なる花とし思ふ群落の荒地野菊にこころ潤ふ
夕川の石に鴉らゐたりしがなにに遊ぶと思へり夜に
道端に熟れたる無花果一つ食べなんともし寂し夏の終りは

安達恵子
＊
山法師

若からぬいのち運びて米山にこの年も逢う花へ山法師
新緑の天より散らう滝しぶき不動明王と共に浴びおり
自が花とひそか決めいし姫しやがの盛る山路を歩き戻りしつ
くま笹の山路に遇いし青年のたちまち離る清風起こして
くんしょう花うちつけ合いて秋野ゆく君は男童われは女童

安達正博

薔薇園

喘ぎゐるときひびきに^{せり}つゝ電光に冬の縄ひとつゐる
山の間に湧きゐるみづを堰きとめて飼はるる鯉ら清麗にをり
展望台に見下ろしてゐる薔薇の園いまはるの陽に絢爛のとき
甘酸ゆくばらのかをれる園の中きよらかにひびく落水の音
春麗^{うら}らひかりにばらのはなやぎて風めぐるたび園の明るむ

安部登美子

五
首

夜更けて訃報到りぬもはやかのジョコンダの微笑蘇らざるまま
病持つ身ゆゑに心通はせし友逝きわれは罪あるごとし
さまざまに愛別離苦を重ね来しわが身に沁みて聴く「隅田川」
まばろしの君も見所の何辺にか背の君謠ふ烏頭聴くらむ
玉簾分け入り仙宮に伏し沈む貴妃のあはれは君に重なる

安部 守男 *
繚乱の春

別れ霜消えてひと日を春一番荒びしのちの沈黙の樹々
北滴の草原の蘭送れるが根付きて五十年今年も咲きぬ
春雨にけぶる月夜の無花果に白き樹液の満ちる思いす
よきこと的话题をひとつ今日も聞くきらり瞬く宵の金星
ふれあえるもの皆愛し限りあるいのち脈拍つ繚乱の春

安樂城智子 あんきともこ

黙せる思ひ

東京の空赤く燃え錐揉みに落ちゆく機見し日びを忘れず
表情を抑へ列車を送りをり復旧工事に汗したる人ら
言ひたきをかたみに夫と言ひ合ひて黙せる夜更け曇降りつぐ
積む雪に風通る音枕辺にきしみて待つひと訪ひ来るごとく
鳥たちも聞きて居るらむあかときをさらさらと雪散らす風音

安西彩乃 あんさいあやの

奥多摩折々

岩の洞にい湧く清水に仕込むといふ造り酒屋の土蔵白壁
酒に仕込む岩清水汲むとわが来れば先客のありふたつ雀子
わが生るるふたとせ前を白秋の訪ひて歌詠みし多摩の造り酒屋
沢蟹を丸に囲める紋どころ造り酒屋の茶店に憩ふ
さはさはと青葉騒がせ渡る風のかをりききをり奥多摩に来て

安西百合子 あんさいゆりこ

老いの迫力

傍に少年ありし日は遠く言葉すくなき元旦の朝
村社なる頃に変らぬみ社の狭き階段に人ら行き交ふ
排ガスのなき元旦の街道を一直線に遠くのぞめり
向き合ひて炬燵に賀状繰りをれば時をたぐりて話題増えゆく
日輪をいましのみたる山脈のシルエットに老いの迫力をみる

安東桂子 あんどけいこ

五首

鵲のひひなが四羽歩み来て子猫のしつぽをつつきて遊ぶ
しなやかに垂れるる草にたまゆらを憩ひて去りぬ銀しじみ蝶
にはか雨過ぎたる午後にかきよする干草はつよき日の匂ひして
夕月夜うかれ鮑も来てはねる我が狭庭辺の紫陽花のかげ
さみどりの田毎の苗に風立ちて夕べ河鹿の遠近になく

安藤光一 あんどこういち

退職

定年を待たずともよし峰渡る花の嵐に散らむと思ふ
神妙に退職辞令受け取りて西日まばゆし庁舎出づれば
今日の日は沈みゆくとも明日はまた日を仰ぎ余生を生きむ
退職に心揺れしはいつの日か妻と茶の香に和める今朝よ
自由とはなんて素敵と書きくれし退職の友お幸せにね

安藤佐貴子 あんどさきこ

五首

肌寒くなりし野分の風の中しまひ忘れし風鈴が鳴る
亡き夫と假に名付けし苑の径さくら小路にひとり来て佇つ
小春日の季めぐり来て一行寺夫が葬りの日の色にもゆ
災害をいたく怖れし夫なりき三原噴火の夜にいのち断つ
萎えやすき脚を馴らすと来し苑に如月なかば鶯をきく

安藤鶴子 あんどう つるこ

早春

春雪に明けしエリカの艶増して紫小花陽に輝けり
水仙の移植なし居て三年目待ち侘ぶ春よ白き花咲く
水瓶の縁に止まれる野鳩一羽水含みては宙に飛ばせり
寒明けに夜半の雨の降り止みて輝く朝よ小虫飛び舞ふ
朝夕に声掛け愛でし沈丁花小さき花影開き初めたり

安藤寛 あんどう ひろし

菅公

君子の身にありながら菅公は中傷を受け流罪に服し給ひし
困ひ無き古き板張りの榎寺筑紫の風吹けば寒けし
天拝の御衣高く捧げ持ち都の空は御身に遠き
潔き身を西空遠く隔て住み筑紫の風に病み給ひけり
覚えなき譏奏深く陥されて流謫の御身衰へましき

安藤ふみ子 あんどう ふみこ

山菜莢咲きて さんさいゑみ

朝日光射して明るき院の庭山菜莢一もと黄の花咲かす
粟粒のごとき蕾を数多つけ手入れのよきや咲き咲く山菜莢
さんしゅゆの黄の粒花の美しと眺むる庭に風冷たかり
山菜莢と花の名書きあるその木札小寒き風にややに搖れつつ
山菜莢に侘助添へてうすばたに活くれば共に伸び立つ如し

安藤美佐保 あんどう みさお *

いちはつの花

昼の雷鳴りとどろけばそぞろなる五月いちはつの花のむらさき
草刈機の草なぎゆけばひそみいし小蟲微塵となりてとび交う
庭隅に小菊むれ咲きふみ入ればとびたつ蜂の羽音鋭し
風吹けば吹き溜りとなるガレージに乾反りてのこる青桐の葉は
故里より道づれなりし満月に別れ告げなん終駅近し

足立早苗 あだち さなえ

はらからは異郷に

異郷とふ地にわが同胞は埋もれるカナダリーフの紅葉散り積む
わが視線及ばざりけり遙かなるカナダの地の果て落暉に対きたり
放牧の牛の喰みある枯草に早くもカナダの冬訪れる
離陸なす飛行機の窓より再びと踏む事なからむ地を眼裏に止む
はらからの住み継ぐ異郷の街あかり離陸せむ吾に冷たく光りぬ

足立春美 あだち はるみ

疑惑の智

献血に取られ冷えゆく血液に病院の窓赤く夕焼く
薄れゆく記憶たどるに夕暮れを萩の花弁音無く散りぬ
うつ鍼の響きがきくといふ道理電波にたとへ我はツボ押す
手渡さるは普通文字らし封筒を食卓に置き読める眼を待つ
起き伏しは己一人の事多しそば近く妻のゐる時にさへ

足立久子 あだち ひさこ

五首

正月を港にもやふ漁船旗とりどりに風を陽を呼ぶ
ひるがほの群れゐる花に影をおき宙にとどまるしほから蜻蛉
葉群れよりゆらりと出でしすき穂の一点に射す晩夏的光
刈株を鋤きかへされし田の畦の草紅葉ゆめ残る明りに
みづならの林の小道木下道踏めば時雨に滲む音する

足立幸恵 あだち ゆきえ

ペイブリッジ

高速道路大き螺旋を描きつつペイブリッジに至るに間あり
横浜と川崎の街湾に沿ひ一つに見ゆるペイブリッジの上に
大いなるきりんの如きクレーンは等間隔に埠頭に並ぶ
見下ろせる埠頭を埋めて積出しの新車は並ぶ色さまざまに
ペイブリッジ渡りつつ聞くカーラジオ札幌の街に初雪降ると

阿川千恵子 あがわち えこ

刺子の布

仕舞ひおきしやりかけの刺子とり出だし生くる間惜しみ刺しゆかんとす
いささかの心のゆとり紺木綿に刺しゆく白糸きはやかに浮く
藍の香のしるき木綿の強布こはめに一針一針刺す糸白し
大振りの刺子のこたつ掛母われの生きの日のしるしと遺されゆかむ
健やかに母在りし日の形見とて刺子の布を子等は見るべし

阿久津いさお あくつ いさお

五首

納屋隅にまろぶ馬鈴薯芽生えたり 春蒔野菜の季知らすがに
黒々と野焼されたる畦道に 芽生えしつくし背伸びを競ふ
農守りし過去息づくや節くれの 手に古稀祝の指輪かがやく
水張田を縁に染めゆく田植機よ 早乙女並びし杓き日の頭つ
馬引きて暁の明星仰ぎつつ 田植の上代うへしろを掻きし日はるか

阿部栄蔵 あべ えいぞう

五首

蒸し暑き通夜に並ぶこの庭に幾たびか来つ危篤の報に
庭なかに棺をめぐりて三回りする女らはみな白き布かぶり
長く病みぬし老女焼かれをり梅雨空に染みゆく常の煙の如く
梅林のなか歩きぬ姫女苑ぬれ咲く小径棺焼くる間を
強く降る夕立の音縁側にならびききゐる三匹の猫と

阿部一直 あべ かずなお

* 解体

解体は明日となりたり汗と涙の染みし柱をひそひそ撫でる
亡父母を避難さすごと仮住居に位牌移して解体を待つ
解体の棟のくずるる一瞬を思わず声上げ掌を合わせた
吾が終のこれが住み家か新築の成りたる仏間に妻と対き合う
老兆す性の哀しさ明け方の淋しき夢にひと日こだわる

阿部^{あべ}キミ

古本

五十年の微の句の漂ひて夫の古本幾箱並ぶ

青春の想はいづこ呆け夫のものはぬ古本に冬の日当つる
見覚のなき古本の幾箱を見入るも虚しきづなはいづこ
呆けしまま施設に生くる老夫の朧こばれぬ古本開けば
いつの日にあげしや吾手届かざる高きに古本微に埋もれて

阿部^{あべ}十三^{じゅうぞう}

寒夜

今少し寝ねむ目覚めの午前四時往きて返らぬこと思ひぬ
昨夜の雨吸ひて湿りし庭土のことの過ぎたるごときしづけさ
庭の辛夷の花芽膨らむよろこびに今朝まだ遇はず雪降り出でて
朝の茶房に黙念とをり周辺はすでに戦さを知らざる世代
残菜をもて亡き母が仕立てたるのつべい汁恋ほし師走の寒夜

阿部^{あべ}千代^{ちよ}

五首

日溜りに立ち並びたる霜柱将棋倒しのごとく崩るる
桜木の下に立ちます六地藏なべて伏目の肩に花びら
濁水を湛ふる雨後の阿賀ノ川遊覧船は水脈太くひく
旅にあれば心は和ぎぬ立葵の花のまぶしき辺りをすぎて
朝靄を包めるごとく羽たたみ白鷺は秋の浜に降りたつ

阿部^{あべ}正義^{まさよし} *

廃校

統合 分離くりかえされて学びたる校名はついになくなりけり
廃材と瓦礫と山に積まれたる廃校跡のおそき月の出
雨しとど降る廃校の中庭にくちなしの花のさゆらぎやまず
ひと降りの雨が光らす廃校の木々の若葉の今朝は色ます
ボール蹴る子等の声など聞こえてきて廃校跡に土けむりたつ

阿部^{あべ}みち子^こ *

広隆寺弥勒菩薩

み佛の艶なる小指を青年の折りしは杏く今も美し
折られたる小指を補修されしよりガラスケースにおわすがさびし
み佛のやわらかな頬に指先の觸れむばかりの仕草みつむる
閑かなるみ堂におわす弥勒菩薩とわなる笑みは孤独保てり
三たび訪いしみ佛なれどその小指に妖しきまでに魅せられており

阿部^{あべ}光華^{みつはな}

つれづれに

白玉の椿てふ名の花活けて歌友はいつも凜と座しをり
春来れば退職の身を淡々と小鳥の餌場作りてをりぬ
ナツメロを口ずさみつつアネモネの球根植ゑて冬越す人ぞ
町角にからくり人形踊り出で刻告げをれば花冷え纏ふ
春一番吹き抜く町の木馬館人情芝居の幕引きをりぬ

阿部 米子

嗚呼 畑和子先生

歌詠みの七十七は未だ若し白寿の歌の欲しかりけるを
ばばさまと声をかけたき死のお顔三十年を見えざりけり
師の君にして母なりき背きたるわれを宥してをりをりの文
もろもろの思ひあふれてみ柩の出でます今を嗚咽止まらず
暫くを待ちませ黄泉路に探し当て非礼の数々お詫び申さむ

阿部 良全

廃船の影

退く波が真砂にしるく遺したる藻屑の黒き孤線ひとすぢ
岩礁に砕くる飛沫浴びしとき須臾頭ちになり杳きときめき
滅びたるかたちのままに傾ける廃船の影あはあは長し
砂浜に空缶いくつ吹かれをり豊饒といふ夏の奢りの
冥き海のはたておぼろにかすめつつめぐる燈台のすぐき光芒

阿部 麗水

老残の歌

体験者われら没後はおのづから疎まれ風化か戦争の惨
戦傷の後遺症にて治癒のすべなき耳鳴りに五十年耐ふ
沙洋鎮に仮泊し初めて聞きたりし銃声・砲音今も耳底に
中国の戦野を駈けし足弱り朝は枕に諸手突き立つ
存へて米寿を迎へ高齢者叙勲を受けし果報者なり

会沢 喜子

港

澄みとほる鳴き声ときに放ちつつ海鳥の群旋回止まず
うみぎしの魚市場いたく片付きて不漁つづきの潮風とほる
あぐら居の男二人が堤防に釣するそびら仏陀にも似て
海鳥の強羽根空を截る音の伝はりてくる突堤に佇つ
はためくはお舟祭の一日か大漁旗見ぬ港さびしゑ

相田 美恵子

五首

寒き日の差す港への石みちに網繕へる漁師の声す
潮引きし磯にはり付く岩海苔を摘む嫗らの甲高きこゑ
岩壁の磯馴れの海桐花いたぶれる風は葉裏を白く返せり
貝殻の混じりゐる径歩み来て白く輝く灯台仰ぐ
釣り餌となるらし小さき磯蟹が泡吹き溜めて売られぬにけり

相野 谷森次

雀

春風の枝に潜みて声も無き雀らのいのちおおよそ二年
如月と葉月に孵る雀らはおのづから余剰の数ともならず
如月に孵れる雛もすでにして親の雀と姿変らず
留鳥となりたる河原鶉のむれ寒日も千々と餌に寄り来る
花萼の花閑けしと跼まれば緑葉か花か交々匂う

相原恵佐子 あいはら えさこ

光線

ひよどりの雛の嘴夏の陽に透きて真上の空を啄む

ドアの横に隠るる人など会ひたくなし風切りて白き階段くだる
舞台効果の煙にむせつつ眼に追ひぬ光線のなか唄ふ男を
和洋折衷の衣裳がめだつ踊り子の開くてのひら木彫の如し
注文のメモのうづら豆を誤読せしかうづらの卵が配達されぬ

相原健一 あいはら けんいち

秋に

入間川の乏しき流れ片寄りにうねりし末べ葦にかくれる
暮れゆけば入間河原の高空を渡る雁が音耳に入り来る
おのおのが葦立ち伸びし貴船菊やがて咲くらむ蒼見え初む
秋雨の降りつぐ庭のおどろには秋明菊が彩り添ふる
紅をさす秋明菊の花いくつ残りしままに霜は来るらむ

青井和子 あおい かずこ

北欧旅行

着陸瞬時身に伝はりて吐息こぼれぬヘルシンキ空港今し落日
潮風に朝市寒し鮭の眼澄み甘海老は動く沖はバルト海
地の果に紛るる思ひに来しオスロー街に日本車しばしば走る
見の限り綿すげ銀に広がりてモーラよりの風にS字にうねる
昼よりも明るきチボリ公園の無言劇をみる眼蒼き子の側

青木綾子 あおき あやこ

黄落

玄界の入江の鴨は夫と見し日のごと水に亘なしぬ
み佛の給ひしとしか言ひやうのなき小春日に忌を修したり
はぜの枝を覆ふ零余子の蔓ひけば珠芽ほろほろ顔にこぼれ来
子がくれし赤きブルゾン来て出むか年齢などに相談をせず
黄落のときを愛しみてたもとほるけやき通りにつづく城址を

青木きね夫 あおき きねお

TVの表情

見られたくなき負け場所が映されて去りゆく者のにがき歳末
宇宙ゆくロケットのごと一瞬の停止ゆるさぬ氷上のペア
しなやかに中國歌手がうた唄ふ字幕は固き難解の文字
コンサート指揮する人も聴く人も近き硝煙を無視のひととき
戦ひは終りて久しシベリヤの若き遺骨が老いてダモイす

青木幸一郎 あおき こういちろう

夏野菜

風に弱きハウスを持てば南の海に起きる台風に神経つかう
日々の生活を支えてくれる夏野菜無事の出荷をと只管祈る
特産の雨除けホーレン草の敵台風のシーズンとなり頭が痛し
ほつとする間もなく次の風が立つ今年は台風の当り年かも
出荷間近の野菜を持てばテレビ放送の天気予報逃さず聴きぬ

青木佐喜子

さくら

さみどりの花托を透かすしろざくら巨いなる空に一樹潔し
樹々の間の落花しづけく母と子をつつむ桜の白き天地
咲き満てる桜の林降るとなき花びら浮けり無音の界に
俯ける脳に懸かるは何時の齟齬さくら並木を潜りてゆかむ
朝なさな窓の視界に萌ゆる葉の双掌ひろげて日の光呼ぶ

青木祥太

ジャスマミンの花

鉢植ゑのジャスマミンの花に今日の照り清々しもよ夏は来向ふ
ふりやまぬ光の中のジャスマミンの花の黄の目にしみるはつ夏
蜥蜴ゐてジャスマミンの花咲いてゐて空澄み透りしんしん真昼
咲き終りてはこぼれゆく雪柳の花がらの嵩ほどのかなしみ
白々とブルーベリーの咲き垂りて四月の真昼しんと澄む

青木千代子

花

煙るごと春の雨降り庭隅の桜の花芽光をまといふ
贈られし誕生祝の花の鉢移る日差しのかなに置き換ふ
さやさやと風にさやげる笹竹を眺むる夫の後に立ちをり
故郷の父母想ひけふもまた在宅看護の講座聞きゐる
碧空にいろんな記憶が浮びきて遠く思へた定年のくる

青木美沙子

畑和子氏逝く

治癒の見込みありて告知と解しゐしを「癌病む」の五首遺し逝かせし
弱り給ふと洩れ聞きし後旬日もおかて葬りの知らせ届きぬ
「こんなに早く」と後は続かず通夜の席に遠来の友と交はず数語を
瑞光院とよび奉るとぞ供花あまた飾られてもはや語り給はず
欠詠にあらでみ歌のもう載らぬをだまき誌追悼の号の組まるる

青木陽子

御在所

雪雲の北へ流るる御在所の風は樹水の梢を打ちぬ
けだものの臭ひを消せる雪踏みて冬に無援の園巡りゆく
群るるなく柵に寄りくるカモシカの野性無くせる眼さびしむ
総身を長き毛足に蹲る老いカモシカに雪浄らなり
人界に遠きしづけき雪を呼ぶ風にわが耳研がれて佇てり

青木彬樹*

寒に入る

寒行の一週間終え冬枯れの京の歩道を駆へと急ぐ
「教師補任」永年の夢達成し帰途の列車でビール味わう
寒中の後期修練終えし夜妻と暖かき鍋をかこみぬ
児等がひき教師もひきし流感の猛威の続く立春の日々
白浮塵子の来襲のよに降りしきる退庁時刻の校庭眺める

青野^{あおの} うた

家族

疎外さるる老いの嘆きを言ふ人に調子を合はす我のいたはり
程程にピールつぎくるる息を言はず離れて食すと人語れるに
予備校生友に誘はれ出かくるに金持ちしやとその父言へり
帰省せる我が女子大生こまやかに母と語らひキッチンにをり
第一子産みたる頃の胸乳の張り思ひ出てその娘恋ふ

青野^{あおの} 智道^{ちどう}

秋神楽

屈託もなく話しゆくすでに地位の軽くはあらぬ教へ子の来て
阿亀ひよつとこ科^かを作りて舞ひくるる三人^{なたり}の茶の間に秋神楽来て
冷えたてば小花をつけし犬蓼が夕焼け空のいろに広がる
神技とも見ゆる手話^{わらわ}なれど耳しひの人らが解^とするはどれ程ならむ
雪さへも降らねばと又言ふ母と雪ありてよしと言ひはる吾と

青柳^{あおやぎ} 絢子^{あやこ}

春愁

こもり居の心放たん窓練れば淡あはと冬の夕茜空
春の日の眩しき縁に筍の皮むく一とき病む身忘れて
テント張りの茶屋にラムネなど飲みし幼な日の花見懐しきかな
藍色の浴衣着せたと君言ひしは杳き日の祭りの夜にてありき
一人弾くピアノの音のかそかにて少女は物想ふ年となりしや

青柳^{あおやぎ} 猛^{たけし}

五首

つなぐべき言葉をもたぬひとときを卓灯の火は揺れてをりたり
みづからのあやふさはこび吊橋に揺られてひとり渡りゆくなり
かさなれる誤解とくべく書く手紙ことばのやうにやさしくならず
あたたかき二日つづきてそのあとの雛の日の朝雨降り出でつ
こころにはのこれど遠くただ鳶の舞ふを見てあつ恋人岬

青柳^{あおやぎ} 千萼^{ちがく}

ひるのマップ

鳩時計鳩のぞかずに昼はうみあをきをままに夢になだるよ
安けきをあがなふ木札に降りかかる花の悶えはあな裏にきけ
乱菊によせて眼のかがやくをあいなと言ひてカスタ二拍子^{ひじょう}
人生とは真剣といふジョークよと無人館のひるのマップを
柵の黄なるとげのかなしけれ束^{つか}ぬるあいもそこそこにして

青山^{あおやま} 榮子^{えいこ} *

天の光

目交に見えつつ隔つる北アルプス残雪天の光に映ゆる
下りゆく美しヶ原放牧の牛のびやかに群れて草食む
山峡の棚田の早苗整然とさみどりさやかにそよぎておりぬ
路の窪の雨水に映ゆる夕茜神より思わぬ美を賜いたり
星の名の一つ記憶に蘇り今宵輝くカペラを仰ぐ

青山かほる あおやま

納骨

ひたすらに土に生きたる亡父なればお骨に添へぬ一握の土
西山を借景となす光明寺芽吹きの前静けさに佇つ
亡父の遺骨しかと抱きて参道の芽吹き初めたる木下闇ゆく
暁の堂に読経の満ち溢れ孫らもひとしく氣に吞まれたり
亡父のみの納骨なりしは唯ならずここそは永久の眠りと別る

赤井清子 あかい きよこ

注連縄

注連縄の工作終へて帰り来し孫の大声厨にひびく
工作に注連縄作りし孫の手は指細くして未だ小さし
持ち馴れぬ藁の手触り受けとめつつ注連縄作る孫うかびくる
わが家にはやや大ぶりの注連縄は孫が工作に作りたるもの
飾らむと小さき輪じめ買ひて来ぬ足萎え支ふる杖を拭ひて

赤井鈴子 あかい すずこ

流れに

空に向け斜線に並ぶ墓岩群その頂きは古里の秋
墓岩を辿りて姉と頂に呼吸はづませて見る田辺湾
施無畏寺の庭より望む荻藻島ほのぼの碧し秋を風ぐ海
西広の海見下せばをしみなき陽光は反す波の流れに
釣りをするわれの傍にて半日を見物せし男なに面白し

赤池芳彦 あか いけ よしひこ

夜の口笛

母がよく口ずさみぬし「故郷」を墓洗ひつつ小声で歌ふ
亡霊を呼ぶことありと母親に禁じられたる夜の口笛
仄暗き庭にたたずみ口笛を吹く少年を母よ咎むな
山躑躅狂ひ咲きたりこの冬の花へ眩しき真昼と静寂
この胸に抱けば少し抵ひて細き身体のかきくきと鳴る

赤石治子 あかい じはるこ

五首

みちのくの食用菊摘む月出でて花しろがねとなりゆくまでを
月光の遍き中に放ち遣る筈につきたる碧き蠟螂
インド・ヨーロッパ系の若き顔あまた立ちたる夕暮を行く
一刀両断 熟瓜割くごと敵ころしきやまとたけるは
はるばるとシルクロードを歩み来て小さき仏は我にはほゑむ

赤川達海 あか がわ たつみ

夜の浮雲

通夜の間に肩寄せ合ひて正坐せる孫三人の膝の丸みよ
正坐せる孫三人の膝がしらすこやかに見ゆ丸くそろひて
通夜の間の畳のいろよ灯火のゆらぎにわづかの影をつくりて
通夜の間の畳の四隅明るかりともし火長くさゆらぎもなく
うす墨のにじみしごとき冬の空突然の訃報の通夜の帰り路

赤津 健壽

未解説の木簡

未解説の木簡あまた積み重ねこれが歴史といふ声のする
この無限すべしなれば降る雪を降らしめてゐる 飛鳥は夕べ
あり経つつながむる月の淡くして大津皇子の尊はあはれに遠し
人の世の翳り流るる街裏に生れたる虚無といひて嘆ける
瞳に笑みをにじませながらそれからと問ひたる女の淡き夕月

赤星千鶴子

消えやすく

目標に全て届かぬ生涯か夕べを足の爪切りてゐる
火山灰流すホースの先にたつ虹は幻よりも消えやすくして
倅せは小さくて足る降灰のなき日を干して布団ふくるる
無人駅のベンチに秋陽あふれゐて灰降らぬ地は静かなる昼
頬の蚊を打ち呉れし夫のてのひらにつきしわれの血美しき赤

赤松 伴子

女面の唇

愛と憎のいずれならんや・架かりいる女面の唇の開かんとして
杳き日の過誤恥じよとやあふれつつ籠の白薔薇香り放たず
止むを得ず義理またひとつ欠きて来て夕餉・秋刀魚の腸ほろ苦し
帰り来る夫待つ耳にとんとんと「つう」が紡ぐや箴の音聞こゆ
極まればとどむる術なし陽に輝りて紅葉は終の一葉を落す

赤松 宜子

重信川

見はるかす重信河口冬ざれて舫ふ小舟のひとつ動かぬ
「重信川渡し場跡」の標識にはぐれかもめの翼休むる
弧を描く砂嘴踏みしめてそぞろ行くわれに孤独の影従きゐるや
けだものの臭ひしたたかに身にまとい獵人二人店に入り来る
獵人の会話切れ切れに聞こえる「狸・鉄砲・またぎ・あのしし」

秋田 倫子

潮

河口より逆流する潮の泡立ちてしじみ採る吾が指に迫り来
たちまちに大河となりし満潮の岸辺の小舟高く浮きたり
大潮に乗りて上りし魚の群の跳ねる音聞ゆ月照る河面に
引潮にうからと小舟あやつりつ小魚の群のすきては見ゆる
川底のすきて見ゆる岩肌にあたゆとう青のりの緑鮮らし

秋葉 和子

五首

かけ寄りにて杖ともならん若きより我を勞り下されし師の
見慣れたる筆跡に心ときめきて文開くる間も惜しみつつ読む
新しき書架に蔵書を並べつつ学ばん心ふつつと湧く
マリーナの風渡り来る心地するバラ咲きそめる初夏の朝
月影の凍れる道を矢のごとく家路を急ぐつつ音高し

秋葉貴子 * 冬木立

差し交わす織き枝々かすみあい木立は冬の和みをいだく
虚に住む小鳥も去りて剪定を終えたる木々の裸形さむぎむし
危険度は目に見えぬなり蛇口よりほとばしる水清きを汲みぬ
不信感募る夕べをいたずらに甘く香れる花を忌避せり
完熟のトマトを食みぬ遙けくて思い出せぬ香をかみしめて

秋元和子 新緑の窓

わが生くるよろこびとなる新緑の溢るる窓よ風に彩あり
若きらに負けじと歩む野の小径風の中なる木屋にほふ
眠りたる如き池にも春の陽の底まで届くかあぶく浮かび来
追ひ越せば又追ひこさる疏水辺の朝の散歩に今日を占ふ
百人一首半ばを暗記せしといふ尚子の夏の終り近づく

秋元みつ枝 傷つきし蝶

身をこがすことも知らでかわが持てる花火めがけて揚羽飛び込む
何故に狂ほしく翔ぶ揚羽ならむ山の夜なれば暗示めきたる
庭の芝生に黒き揚羽は動かざる昨夜の花火に羽傷めしや
彼岸よりの使者かも知れぬ蝶よ癒えわれのかなしみひとに伝へて
幼らの去りし山荘しづまりて傷つきし蝶と吾と残さる

秋本文武 * 木魚・家集『珊瑚婚』

うやうやし五十年目に妻とみる亡父武春刻名の木魚
追善の木魚寄進し珊瑚婚秋本家の秋譲りすすまん
水鉄砲水車廻して金魚すくい六時の入浴みんなのぼせる
幼三人裏庭で挽ぐ百匁柿笑い泣きはしゃぐ結婚記念樹
珊瑚婚帯止め仕立のルーブタイ柄になく大目南國の華

秋山美恵子 五首

心なごむ匠の村に柿の実の形なしたる棗見つけぬ
芳しき香を放ちつつ紅梅のいく日寒さに耐へて凛々
紫の大根の花群れ咲けりその可憐さに手ふれて賞でつ
卯月よりリモージュ焼の春の彩紅茶の香りひとしほたちぬ
茄子の苗トマトの苗を植ゑ終へし畑のをちこちに雨蛙鳴く

浅井不二雄 * 奥蝦夷回顧

青葉梟鳴く夜に偲ぶ若き日の十勝の山の樵暮しを
酒壘の藪に転がる飯場跡渡り樵の友ら頭ちくる
残雪の塩幌川の水蔭を食みに仔連れの鹿の群れくる
残雪の十勝の山の造材に彼岸荒れとは吹雪くことなり
蝦夷鹿の啼きゆく尾根の原生林裸木の梢に月冴えていむ

浅川喜代子 あさかわ きよこ

挽歌

早朝を兄重態の電話鳴る再び見舞はんと思ひをりしに
眠るごと八十五年のいのち閉ぢ兄の逝きます篤き看とりに
幾そたび入退院をくり返し兄みまかりぬ残暑のなかを
口数の少なき日常なつかしく笑まふ遺影をながく見守る
兄逝きて十日余たちぬ白露の今宵軒端にこぼろぎ細く鳴きゐる

浅川広一 あさかわ こういち

五首

電柱に貼らるるビラの白き顔剥がれむとして表情をもつ
抽出しに捻子巻時計シュトルムのみづうみほどに古びて眠る
舗装路の水たまゆらの回想を映して人の足が踏みゆく
光晴忌めぐれば杳きふるさとの山 『鳥は巢に』 今か帰らむ
草萎えて降る秋の陽の寂かなる韻き わが手の白き五線譜

浅田 きみ あさだ

寒牡丹

風花の舞ふ寺庭にして寒牡丹藁づとかづき寂々と並む
震へつつ藁づとかづく寒牡丹根方の施肥を如何にこなすや
寒牡丹の花咲かせたる寺庭のお茶処にふつつ湯が滾ちをり
風しづむ当麻の寺は池の面に塔を写して靜かにありき
片寄りて鯉ら眠れる放生の池の面に重なる朽ち葉ゆかしき

浅田 鼓楼 あさだ こうろう

五首

風花の昼を点して磯小屋に女ら寡黙に牡蠣殻を割る
月明に孤独の影を引きながら突放の貨車構内をゆく
宿りせる石州津和野の朝けはひえびえとして窓に霧降る
天窓に夕焼しるき雲伸びて漉きゆく紙をくれなるに染む
逃げ水の光れる町の昼さがり澄みたる声に竿売りのゆく

浅田 雅一 あさだ まさいち

五首

少年の日の汗染みし麦藁帽甦るとき彼の日の海は未来色せり
夏逝くと風のゆくえを見て立つに悲愁の祭りのごとき華やぎ
風吹けば道祖神の頬なでるコスモスの花ありてその風を待つ
時計鳴る音に書斎を覗き見ればわれの机にわれの影さす
夜を帰り書斎の灯りつけしとき書籍類忽ち近寄りてくる

浅野 加津子 あさの かづこ

五首

ダークダックスの六十路をすぎし歌声は幅広き人生のひびきを秘むる
大空の下に聲を敷くごとく稲田のひかり黄に波うてる
留守番電話に入りてゐたる君のこゑ久々にしてときめきてきく
羽生市の幸せ運ぶ地蔵様今でも背負はれ家泊りゆく
海底のフアンタスティックな貝の館乙姫になりてわれはさ迷ふ